

2022年5月11日
学校法人 姫路顕栄学園
理事長 小西 淳

キリスト教のすゝめ

昨年に引き続き、今年度も親子学級さんからご依頼を頂戴いたしました。昨年は、「親子学級の皆様へ」とし、内容としては自己紹介がメインでした。そのなかで、「ミカエル幼稚園を、また教会を一杯楽しんで下さい」と最後にメッセージを残しましたが、その後はいかがでしょうか。色々な声が聞こえてきそうです。「何かハードルが高く感じる」、「そもそも宗教はよくわからない」、「興味は少しはあるけど・・・」などでしょうか。そこで、今回は「キリスト教のすゝめ」と題し、一人の信徒として自分の体験や思ったこと、考えたことを語りたいと思います。

【先日のイースター（復活祭）のこと】

今年のイースターは久々に人が多く教会に集まった。それは、今年で体育館が解体されるからだと思う。解体に先立ってあるイベントが行われた。そのイベントは、感謝の気持ちを体育館に書き込んで、お別れをしようというものだった。さて、この教会ではイースターには集合写真を撮る慣習がある。聖堂の前の壁に何枚かの集合写真が飾られている。今年は、やはり体育館で撮影が行われた。カメラアングルは舞台から体育館の入り口に向けてフロアの来場者を撮るということであつた。撮影するのは、例年通り信徒のOさんだった。Oさんは、昔から教会関連の記念写真を撮られている。写真の腕は折り紙付きだ。ニコンの凄そうな一眼レフのカメラで今年も撮影に臨まれた。ところが、今回はなんだかカメラの調子が悪い。全然シャッターが切れない。色々とやってみても、やはりシャッターが切れない。「すみません、時間もあるので・・・」ということで、急遽変更して私のスマホで集合写真を撮った。集合写真というのは、後日の撮り直しができない一発勝負だ。失敗があるといけないということで、これでもかというぐらい何枚も撮った。色々トラブルはあったが、なんとか写真撮影は終わった。その後は、教会の礼拝（主日礼拝）があつたので、信徒は一旦聖堂へ移り、体育館にお別れをされる方は、思い思いにマジックなどで感謝の言葉などを体育館の壁や床などあらゆる箇所に書き込まれた。礼拝も終わり、少し時間をあけて教会委員会という教会の活動を話し合う会合があり、その会合が終わったのが3時頃だったと思う。

次の日から、体育館の解体準備ということで、その日のうちに残りのパイプ椅子や、音響機材、テレビなど色々なものを残っていた数名で運び出した。体育館の床や壁、窓などいたるところにたくさんのメッセージが書き込まれていた。見てみると、卒園時の思い出や、感謝の言葉がほとんどであつたが、中には、何だかよくわからない書き込みもあつた。使っているときは、モノが一杯だったり、人で賑やかだったりした体育館だが、今はモノがなくガラーンとしている。とても静かで、夕日が窓から差し込んでいた。なんだか少し複雑な気持ちになった。「体育館ってモノがなかったらこんなに広がったん

だ・・・」としみじみ思うと同時に、「これまでどうもありがとうございました」と心の中でつぶやいた。そうこうしているうちに、私の帰りが遅いので息子が心配して見に来てくれた。「さあ、片付いたし、帰ろうか」と、体育館から去ろうとしたその時、入り口の扉の上に古い十字架の壁掛けがあることにふと気づいた。「しまった！」と思った。備品類は忘れないようにとせっせと運び出したのに、あろうことか壁の十字架のことは、すっかり忘れていて全く思い出せなかったのだ。集合写真を撮影したときも、スマホの画面の真ん中に見えていたはずなのに・・・である。愕然として、とても自分が情けなくなってしまった。

体育館の十字架の壁掛けは、磔（はりつけ）にされたイエスの像がついたものであった。ずっと古くからあるものだそうである。磔刑像はカトリック教会では、よく目にする。プロテスタントの教会には基本的に置かれていない。プロテスタント教会では、磔刑像のないシンプルな十字架がシンボルとして使われる。そうなっている理由を詳しくは知らないが、実際に手にとって像を見ると生ナマしいというか、やはり十字架は恐ろしい処刑の道具であることが思い起こされる。キリスト教の教会用品で十字架や磔刑像は、それ自体が信仰対象になるのではなく、それを通して想起される神を信仰する、つまり「まず、見て思い出す」ための用品なのだと思う。だから今、自分の手にあるのは「壁掛け」だと言ってしまうはそれまでなのだが、一方で「そうではないのだ」と思った。だから、体育館の磔刑像もずっと、私たちがここで行う営みの一部始終をただ静かにずっと見てこられたのだと見て思い起こした。そして、イースターの意味（キリストの復活）について、何か自分のなかで少し深く意味づけがされたような気がした。

【このエピソードで言いたいこと】

人は誰も生きていくなかで、嬉しいこと、楽しいこと、つらいこと、悲しいこと、色々と経験をします。その経験する出来事に意味を見出すこと、またそれによって生きる力が与えられることが宗教の一つの役割だと私は思っています。イエスが皆の裏切りによって絶望のうちに十字架で処刑されたとき、神は最後まで沈黙のうちにおられました。それは、わたしたちの日常においても同じことが言えると思います。つまり、「神は沈黙のうちにおられる」のだと。しかし、その沈黙の中から、かすかに語りかけておられる神の声に気づきたいと私はそう思っています。今回のエピソードは、このことを思い出させてくれたように思います。私たちが何か問題を抱えて苦悶していても、絶望するようなことがあっても、神は沈黙のなかにおられます。決して問題に介入して直接解決したり、成敗したり、バチを当てたりすることはありません。それは私もそうですし、実際に皆さんも経験されていることではないかと思えます。だからと言って、神はいない（存在しない）という答えをサッサと出して通り過ぎてしまうのは、大変もったいないことだと思います。日々の喧騒のなかで、ほんの少しだけでもいい、イエスのことを思い出して、沈黙のうちにおられる神の語りかけに気づくことができるような静かな時間が持てたら・・・「何かが変わる」のではないかと私は信じています。